

批評の修辭的身体

玉井 暲

1.

ワイルドがみずからの批評テキストにおいて発表した数々のプロヴォカティヴなマニフェストのなかで、「芸術が人生を模倣する以上に、人生は芸術を模倣する」という提言がもっとも有名であることに異論を唱える者はほとんどいないであろう。この問題の格言的マニフェストは、エッセイ「虚言の衰退」において3度提示されるが、それが最初に提示されたとき、「これは逆説（パラドックス）のように見えるかもしれないが、そしてそもそも逆説というのはいつも危険なもののだが……」（下線は筆者）と但し書きが添えられていた。ここには、ワイルドの批評的意志がはっきりと表わされている。なにゆえに、文学的マニフェストは逆説的言説というかたちをとらねばならないのか。

ワイルドの批評言説の特質は、その衝撃力にある。それは、批評内容が契機となって引き起こされる効果というよりは、むしろその批評のスタイル、批評言説のかたちそのものが孕む効力ととるほうが妥当であろう。この批評言説は、逆説（的表現）と呼ぶこともできようが、この言説にあっては、批評内容と批評形式が分かちがたく一つになった、そして批評行為をまぎれもなく実行している存在が、つまり批評的主体というしかない行為体が躍動しているのをしかと感得できるのである。この批評行為体を、ここでは批評の修辭的身体と捉えることにしよう。

ワイルドの批評の言葉は行為する。この修辭的身体は、みずからが惹起する衝撃力において、逆説のもつ言説構造とパラレルな関係性をもっている。これを確認するために、もうひとつの例を検討してみよう。『ドリアン・グレイ』の第3章に、ヘンリー卿が叔母アガサ夫人の昼食会に招かれ、急進派の国会議員サー・トーマスや深い教養を備えた老紳士アースキン氏たちと、アメリカ人の特色を話題に取り上げて会話を交わす場面がある――

サー・トーマスは手を振った。「(前略) アメリカ人というのは、それは興味ある国民ですよ。何しろ、文句なしに合理的な国民だ。それが第一の特

色でしょう。アースキンさん、まったくかれらは合理的だ。アメリカ人にはナンセンスというものがまったくありませんからね」

「恐ろしいことだ！」とヘンリー卿は叫んだ。「わたしは肉体的な暴力なら我慢できるが、理性の暴力には到底、耐えられない。暴力的な合理主義を揮うのは不正ですよ。それは知性の足を狙って打つようなものだ」

「どうもきみの言うことはわからない」 幾分、顔を赤らめてサー・トーマスが言った。

「わたしにはわかる、ヘンリー卿」とアースキン氏が微笑を浮かべながら言った。

「逆説もそれなりに悪くないが……」とトマス准男爵は言い返す。

(下線は筆者)

この台詞のあとに、逆説の基本的特質が明らかにされる——

「いまは逆説ですか？」アースキン氏が反問した。「わたしはそうは思わない。いや、恐らく逆説だったろう。ともかく、逆説の道こそ真理の道であり、事物の本体を見きわめようとするならば、それに綱渡りを演じさせねばならない。真理が軽業師になったときはじめて、われわれはそれに判定を与えることができる、というわけだ」

「おやおや！」アガサ夫人が言う。「殿方の議論のしかたといったら！あたしには何を話していらっしゃるのかさっぱりわからない」

(下線は筆者、福田恒存訳)

この会話の場面では、「アメリカ人」をめぐる慣習的な見方が覆され解体されて議論が展開されている。この慣習性解体のスタイル、修辞のすがたこそ逆説にはほかならない。

では、逆説が逆説として認知されるのは何によるのか。ここには聞き手、受け取り手の反応が不可避的に関わっている。それは、サー・トーマスとアガサ夫人の「わからない」という言葉に典型的に現れているように、聞き手の理解力・判断力を混乱させるほどの強烈な衝撃性による。この衝撃性がいっそう強まると、それはワイルドに言わせれば「危険なもの」という破壊的効力を帯びることとなる。

こうした逆説とパラレルな関係にあるワイルドの批評言説もまた、話し手と聞き手の間に確立されていた「知」の慣習的システム、あるいはコミュニケーション

の慣習性を動揺させ、ときに解体させるにいたるほどの転覆的性格をもっている。このとき、聞き手側に生起する判断停止ないしは理解不能状態を表わすものとして、戸惑い・困惑といった身体的反応を伴うのがその特徴である。

2.

ワイルドの批評の修辞的身体は、批評テキストにおいてのみ行為するのではない。この修辞的身体を立体化したものこそワイルドのドラマではないのか。たとえば、その一例に『ウインダミア卿夫人の扇』を取り上げてみよう。

この劇の最終幕においてアーリン夫人が娘の危機を救い、そのためロンドンの社交界を出てゆかねばならなくなったみずからの運命をめぐって、ウインダミア卿と会話を交わす場面がある——

アーリン夫人：私は心のない女だと思っていました。私には心があるとわかった、でも、心などというものは私には似合わないのよ。ウインダミア、どういうわけか、モダンなお洋服にぴったりしないのね。なまじ心なんかあると老けてみえるもの。(テーブルから手鏡をとって覗きこむ) しかもいちばん大事な瞬間に人の一生を台なしにしてしまう。

ウインダミア卿：あなたの話を聞いているとぞっとする——心の底からぞっとする。(下線は筆者)

アーリン夫人の言葉は、逆説のもつ特質と通じている。それは、ウインダミア卿が「ぞっとする (with horror)」という身体的反応を引き起こしている現実表象されている。この「ホラー」の感覚は、ウインダミア卿に備わっている従来の慣習的な認識のシステムでは把握できない転覆的発想ないしは未知の知に困惑したときの反応にほかならない。

転覆的発想の構造を検討してみよう。アーリン夫人は、いま、娘がかつての自分と同じ過ちを犯そうとしている状況に直面し、これまで意識することなかった「心」の存在に気づく。この「心」とは、人間的感情ないしは倫理的次元にもとづくものがある。ところが、アーリン夫人は、いま、「モダンなお洋服」「老けた容姿」というそれとは相異なる次元の概念、あえていえばファッションや美貌に関わる概念をこの倫理的問題と同一平面上に置いて言説を打ち立てている。倫理とファッションが同次元に捉えられるとは、ウインダミア卿にとっては未知の発想であったにちがいない。アーリン夫人の台詞はこうして、異次元の概念同士をあえてひとつの言説として連結させることにより、慣習的な知のシステムを動揺

させる。この衝撃性が聞き手における「ホラー」という身体的反応となって現れたのだ。

『ウィンダミア卿夫人の扇』は、「心」と「モダンな洋服」との対置に窺われるように、倫理的コードと審美的コードとの二項対立が、この劇空間における知のシステムの持続と解体、あるいはその構築と脱構築に関わる基本構造を形成している。まず、倫理的コードの次元において、“good”と“bad”（およびその類似概念として“wicked”）の言葉がペアを成して、この劇空間に頻繁に現れる。その頻度はほぼ30回にのぼるほどである。主要登場人物の各々は、“good”な人か、“bad”な人なのか、この倫理的認識のコードにもとづいて他の登場人物から、そして究極的には観客から、判定を下される。その中心人物はアーリン夫人であるが、つづいてウィンダミア卿夫妻がその的に晒されるのは容易に見てとれよう。

この倫理的コードによる判定は、ただ単にコードの慣習的持続・構築にもとづいて行われるのではなく、ここに、その慣習を解体・脱構築を志向するベクトルが対置されるなかで行われる。このとき、先の場面で確認したように、劇空間に審美的コードの導入が見られるのである。こうして、アーリン夫人を先頭に、各登場人物は、みずからの倫理的コードが審美的コードによってその慣習的基盤が根底から覆されるなかで観客の審判的視線をあびる。

こうした転覆的構造を孕んだ言葉は、アーリン夫人の次の台詞に典型的に現れている――

どうやら、ウィンダミア、私に修道院にひきこもるか、病院の看護婦とか何とかになってほしいらわね。近頃のくだらない小説に出てくる人物みたいに。そこがあなたの頓馬なところよ、アーサー。実生活では誰もそんな真似はしないわ――いくらでも美貌が残っている限りははね、とにもかくにも。しないとも――この節ひとを慰めてくれるのは悔い改めではなくって、快樂なのよ。悔い改めなんてもう時代遅れだわ。それに、もしほんとうに悔い改める気なら、へたな婦人服屋へいかなくては、でなきゃ誰も信じてくれないもの。ところがあたしときたら金輪際そんな真似はできっこないわ。(西村孝次訳)

このアーリン夫人の言説にあっては、修道院に入って隠遁生活に入るか、あるいは病院の看護婦になって病人・弱者を救済する奉仕活動に従事するかして、悔い改めの姿勢を示す、という倫理的コードは、いま、美貌、快樂、ファッションなどからなる世界を志向する脱倫理的、審美的言説と対決させられて、みずから

の安定を誇っていた既存の価値体系に揺らぎを生じさせられる。

こうした倫理的コードと審美的コードの衝突、対置、あるいは交差は、慣習的世界に動揺を加え、その世界を覆し、慣習的意味の無化を打ち立てる。言葉によって、二つの異次元価値に対して行使する強引ともいえる等価化ないしは無化作用の方程式は、まさしく批評のラディカルな行為にほかならない。これを実行する批評的主体は劇テキストそのものにおいて確かにその存在が感得でき、それは、批評の修辭的身体としてしか捉えられないものであろう。

3.

文学が、いやワイルドという文学者が、松浦寿輝のいう、「世界を所有するには言語の媒介によるほかないのだが、にもかかわらず言語そのものを所有しみずからに同化し尽くすことはどうしてもできないというこの逆説的な事態」（『修辭的身体』『官能の哲学』、2001年）を鋭く認識していたとすれば、この言語動物にとっての不可避の逆説的状况をテキスト化するものこそが、ワイルドにおける批評の修辭的身体であろう。あるいは、江藤淳がかつて作家の「言語と文体」について提起した発想を借りるならば（『作家は行動する』、1959年）、ワイルドは、この批評の修辭的身体において「行動する」のである。